

シンポジウム報告要旨

失敗する読者

中田晶子

この報告では、Victor を Nabokov の短編に登場する「失敗する読者」の一人として位置づけ、彼が自ら語りながら読み取れなかったものを考える。

“Spring in Fialta”では、語り手として Victor が用いる比喩や形容から重要な意味のつながりが多く生まれている。失敗した愛の告白の直後、突然 Nina の手に堇の花束が現れ、それによってこれまで語られながら見過ごされてきた Nina と Fialta の関係が明確になってくる。堇の花束につけられている形容詞“small, dark”は Nina 自身にも使われていたものであり、“unselfishly smelling”には、Nina が初めて Victor にキスした場面で用いられた表現“her generous, dutiful lips”がこだまする。水や高温多湿の気候の記述からも両者は結びつけられている。繰り返し語られる Fialta の暖かさは Nina の体温の高さに結びつき、冒頭の Fialta の海の塩分が雨水に溶けているという記述は、「女の愛が健康によい成分 (salubrious salts) を含んでいる鉱泉であるかのように、気づき次第、誰にでも喜んで飲ませようとする」という Nina の描写につながる。Nina が浮気な女性であることを皮肉に語るこの部分は、水と塩のイメージによって Fialta に結びつき、一転して Victor が Lent の Fialta に感じている、人の心を清める、あるいは癒すイメージに重なる。Victor が愛を告白した時の Nina の顔をよぎる一瞬の醜い表情とその直後の恥ずかしげな態度は、Victor の知っている多情な Nina と、癒すものとしての Fialta につながる Nina という二つの姿に対応している。Nina の二面性は、新旧のものがモザイク状に混じり合い、対照的なものが混在している Fialta の特徴にもつながっている。

Victor はこのような Nina の暗示された面を読み取ることができずに彼女を失うが、そのことに気づき始めた時には、白い光が Fialta にあふれ、すべてがその中に消えてしまう。ここで Victor が悟ったことは、Fialta での一日が、その雨がちの天候が次第に乾いた晴天に変わっていくまでの時間の経過であったこと、つまり癒す存在としての Nina がその可能性を失い、消えるまでの過程であったということである。

既に指摘されているように、二人の関係は一面の白い雪の中で始まり、白い光の中で終わる。このあふれる白い光は、出会いの冬の夜に、灯りのともった玄関の柱をふちどり、それが彼らの物語の本の完全な蔵書票になることを邪魔していた白い雪の、姿を変えたさらに強力な再現であると考えられる。Fialta に「あふれる白い光」(this brimming white radiance) と玄関の柱を「縁取る白い雪」(fluffily fringed with white) には、白という色以外に、一つの世界の枠を超える、あるいは変えてしまうところにもう一つの類似性を見出すことができる。Edmund White が言うように蔵書票 (ex libris) は、この二人の物語が「本から

生まれた」(ex libris)ことを示すが、ここではそれが雪の縁取りのために不完全なものになっていることから、彼らの物語が原典の世界から外れてしまうことも同時に示される。原典の一つである Chekhov の”The Lady with the Dog”ではゆきずりの関係の男女が思いがけず真実の愛を見出してしまふのに対し、”Spring in Fialta”では、真実の愛に至る可能性が時折垣間見えるが、Victor はその機会を逸してしまい、二人の愛は失われる。それは出会いの前のこの雪の情景においてすでに示されていたことである。この場面からすべてが始まるが、同時にこの雪は永遠に到達できないもの、あるいは初めから失われているものの象徴であり、最後には白い光となって Fialta のすべてを溶かし込む。

さらに、不完全な蔵書票は、語り手が Nina という物語を所有できない 彼の「蔵書」にならない/読めない ことをも示している。Nina が、具体的なテキストにたとえられている部分がいくつかあるが、そのどれもが Nina を中心にした安定したテキストではなく、不安定なあるいは余白としてのテキストとして登場している。結局「失敗する読者」Victor は最後の死亡記事以外には Nina というテキストを完全に読むことができなかったのである。

* 本稿は、1999年5月15日に東京大学文学部でおこなわれた<日本ナボコフ協会発足大会記念シンポジウム：ナボコフの短篇を読む 「フィアルタの春」を中心に>(司会・講師： 諫早勇一、 講師：若島正、中田晶子、毛利公美)における報告の要旨として会報に掲載されたものです。